



只見高等学校
野球部主将

吉津 塁

15人でつかんだ栄光

新チームが発足する際、例年通りの取り組みではなく、本気で甲子園を目指そうとチームに話し、練習をスタートしました。私達の代は、最初から勝てるチームではなく、特に夏休み期間の練習試合では、負けが続いていました。このため、練習の際には、球のミスに対して自分達で厳しく言い合い、課題を克服するために、常に緊張感を持って練習に励んできました。その成果が実り、秋季大会でベスト8という成績を残し、さらに只見という豪雪の地で野球をしていることが評価され、21世紀枠で初の甲子園出場を果たすことができました。甲子園の舞台は、想像していたより何倍も広く、大きく感じました。選手13人、マネージャー12人の15人という少人数で戦い抜いた1時間53分は、私達の人生にとって、かけがえない大きな財産となりました。

最後になりましたが、全国の皆様から多くのご支援、温かいご声援、誠にありがとうございます。今後も後輩たちが、甲子園の舞台に立つことを願っています。



只見高等学校
生徒会会長

岩佐 優生

希望

私が只見高校に来た際、この学校が甲子園に出場できるとは、夢にも思いませんでした。学校から帰る途中、グラウンドを横切ると、いつも聞こえてきた野球部の力強い声が、3月22日に甲子園でも響き渡りました。

全校生徒100人に満たない只高生に加え、只見町や全国から多くの方が応援に駆けつけ、選手の活躍を見届けることが出来ました。試合中、常に笑顔でプレーする姿を見て、こちらも楽しくなる場面が多く、選手と同じ気持ちを持てることが出来たのかなと思います。クラスにいる時とは異なる真剣な野球部の姿を見て、私たちが野球部のように目標に向かって努力していきたいと思いました。

今回、第94回選抜高等学校野球大会へ出場した野球部のみなさん、また多くの関係者の方々、本当にお疲れさまでした。私たちに多くの希望を与えてくれてありがとうございます。引き続き、野球部の活躍に期待し、応援していきたいと思っています。



只見高等学校
野球部臨時コーチ

渡部 彰

甲子園にふさわしいチーム

この度は第九十四回選抜高等学校野球大会に臨時コーチとして帯同させていただきました、誠にありがとうございます。会津地区からの甲子園出場は私たち指導者にとっても悲願であり、同支部で戦う只見高校野球部の出場を誇りに思います。

「夏の大会の目標は？」、「甲子園です。」「ハハハ。ホントは？」、「……」。これは平成十三年、十八年ぶりに春季県大会に出場した只見高校に取材に來られた新聞記者の方と、当時監督をしていた私との会話です。冗談を言たわけではなかったのですが……。そこから更に十九年、今回の出場に疑問を抱く人は誰一人いなかったでしょう。

私は「甲子園には甲子園にふさわしいチームが行く」と考えています。仲間の特徴を互いに理解し合った上で一つのプレーを完成させること、自分の役割を果たしつつ仲間のカバリングを怠らないこと、感謝の気持ちを持つてひたむきに野球に取り組むことなど、チームと行動を共にすることで、その考えが間違いないと確信することができました。

そして、大垣日大高校と堂々と戦う姿は、多くの方に感動と勇気を与え、只見高校野球部が、甲子園にふさわしいチームであることを全国に証明する形となったのではないのでしょうか。



只見高等学校
野球部
帯同トレーナー

岡本 優紀

コンディショニングコーチとしての役割

甲子園では、コンディショニングコーチとして、チームに帯同いたしました。関西入りし、チームと合流した際、肉離れや肩痛などケガ人がいましたが、毎日施術を行い、結果的に全員が元気に試合に出場出来たことはこの上ない喜びです。

センバツ甲子園を通じて、様々な経験をすることが出来、選手一人一人が成長していく姿を間近で見ることが出来、コロナ禍で大変でしたが充実した日々を送ることが出来ました。

甲子園という特別な場所で素晴らしい試合をしたという事実は一生誇れる貴重な体験です。この特別な体験を野球はもちろん、この先の人生に役立ててほしいと願います。

私にとっても只見高校野球部と過ごしたセンバツ甲子園の日々は一生忘れることの出来ない、かけがえない体験となり、また自信にもなりました。

これからも只見高校野球部をサポートしていきたいと思っています。



福島民報社
南会津支局長

丹治 隆

町民を一つにした 只見高野球部の偉業

二〇二二(令和四)年二月二十八日午後三時過ぎの只見高の校長室。伊藤勝宏校長がガッツポーズを見せた瞬間、私も地元紙の記者としてうれしい気持ちで一杯になりました。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で取材は困難を極めました。感染防止のため選手らへの接触は制限され、現地支局長として非常にもどかしい思いをしながら、慣れないリモート取材などを重ねながら何とか直前で特集紙面を仕上げる事ができました。

只見町は以前から一体感のある町だと取材を通じて感じていましたが、只見高のセンバツ出場を経てさらに町民の一体感が高まったように思います。地域活性化という意味でもナインの偉業が町にもたらしたものは大きかったと思います。

最後になりましたが、準備段階から松田香樹事務局長はじめ只見高、只見町の関係者の皆様には大変お世話になりました。貴重な経験をさせていただき誠にありがとうございます。



福島民友新聞社
南会津支局長

中田 亮

豪雪をも溶かす只見ナインの熱

雪はしんしんと降り積もり、只見町の積雪は2メートルを優に超えていたと記憶する。2022年1月28日、只見高校野球部が第94回選抜高校野球大会(センバツ)の21世紀枠に選ばれた。甲子園出場を知り喜びを爆発させる只見ナイン、涙を浮かべながら選手たちの前であいさつする長谷川清之監督。雪をも溶かす熱気と感動が只見町を包んだ。

甲子園球場で3月22日、大垣日大(岐阜)との初戦に臨んだ只見ナイン。私は新型コロナウイルス感染症の影響を考慮し、只見町で町民と声援を送りながら取材を行っていた。「強豪相手に試合になるのか」と不安視する声もあったが、只見ナインは夢の舞台で輝きを放った。「これぞ高校野球」。彼らの笑顔とプレー一つ一つに胸を熱くした。甲子園出場に立ち会えたこと、現地記者として只見ナインと学校関係者、町民の皆様から感謝申し上げます。



只見高等学校
野球部部长

鈴木 宏睦

当たり前の先にある甲子園

この度は、第94回選抜高等学校野球大会出場に際しまして、多大なるご支援を賜り誠にありがとうございます。甲子園の土を踏むことができましたのは、本校野球部の活動をいつも応援していただいた皆様の長年の思いがあったからこそだと感じております。

思い返しますと、「当たり前のことをできる人になろう。」と長谷川監督が選手に伝えた言葉が、甲子園出場のきっかけとなりました。新チーム発足時は、グラウンドにボールが落ちていたこともあり、とても甲子園を目指すチームではないと感じたのが本音でした。そこから選手は「当たり前のことを当たり前にする」を合言葉に、野球以外の部分でも意識を高く持つて生活するようになりました。その結果、県大会では接戦を制したり、逆転勝利を取めたりするなど、支部予選と見違えた姿を目の当たりにし、高校生の成長の早さに驚かされたことを覚えています。

また、日本有数の豪雪地帯や小規模校などの「困難な環境の克服」が選抜大会の選考理由となりましたが、選手たちにとってはその環境自体が「当たり前」でした。一人一人がそこでできることを生懸命行い、根を張ってきた取り組みが、甲子園での「笑顔と全力疾走」「会津地方初の得点」という結果に繋がったと感じております。

当たり前のことを当たり前にする大切さを学んだ選手たちが、社会で多くの方々に支え、活躍する人材となるようこれからも導いていく所存です。今後も只見高校野球部がさらに豊かな活動ができますよう、一層のご声援、ご協力をお願いいたします。



只見高等学校
野球部顧問

根本 修太郎

只見高校野球部の誇り

積雪3m、全力疾走、全校生徒100人未満、小さな学校の大きな可能性への挑戦……。15人の取り組みや只見高校の環境が様々な言葉で紹介されてきましたが、このチームがスタートした昨夏時点では、彼らは野球がひたすら好きなただの「野球小僧」に過ぎなかったようにも思います。しかし、彼らは21世紀枠に選出される前から、野球技術以外の日常生活に目を向け、21世紀枠としてふさわしい行動や日常生活をしようと声を掛け合うことで人間的にも大きく成長を遂げてくれました。

甲子園で試合終了後の選手たちの表情は今までにない満足感と「もったいなくて野球をした」という気持ちに溢れていたのを今でも思い出します。積雪やコロナ対策など、野球に取り組むために乗り越えなければならぬハードルはありながらも、「野球が好き」という純粋で強い気持ちを甲子園で見事に体現してくれた15人を誇りに思います。

最後になりましたが、この度の選抜出場に際しまして、多大なるご支援ご協力を賜りましたことを心より感謝申し上げます。